上路

本間文庫
文庫 14
D 118

欽定四庫全書

路上

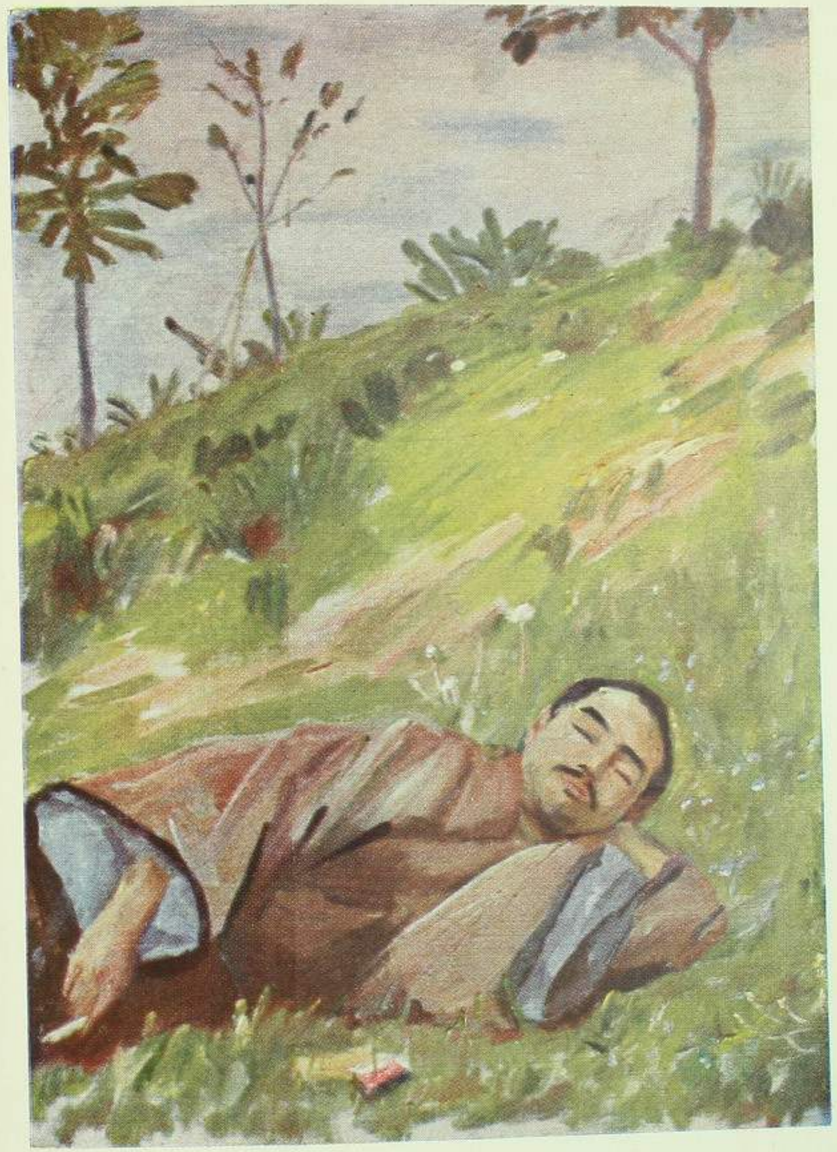
若山牧水

博信堂藏版

上　路

水牧山若

博信堂藏版



路

ある。

ながめてゐた。

遠く青く霞んでゐる。

前に小さな草が

生えてゐる。この日の暮れ方、草の中に

横たはつてゐる。

遠く山々はうすく

紫に輝き、

ひとりぼつちで

草の中に

横たはつてゐる。

明治三十四年六月

本年五月上旬、下總新利根河べりの市川町に山本鼎君と滯在してゐた。或日河の土堤に出て草むらに寢ころんでゐると、山本君が寫生してくれた、この口繪がそれである。柔かな草の中にはたんぽぽや名も知らぬ小さな花などが散り殘つて、日は薄青く疊つてゐた。土堤の向側をば濁つた新利根が流れてゐる。

路上

若山牧水

文庫14
D118

自序

昨年の春出版した「別離」以後の作約五百首をあつめてこの一冊を編んだ、昨一年間に於けるわが生活の陰影である。透徹せざる著者の生きやうは、その陰影の上に同じく痛ましき動搖と朦朧とを投げて居る。あての無い悔恨は、これら自身の

作品に對する時、ことに烈しく著者の心を刺す。我等、眞に生きざる可からざるを、また繰返して思ふ。

明治四十四年九月

若山牧水

自明治四十三年一月
至同　四十四年五月

海底に眼のなき魚の棲むといふ眼の無き魚の戀しかりけり

わが足の着きたる地もうらさびし彼の
蒼空の日もうらさびし

静やかにさびしき我の天地に見えきた
るとき涙さしぐむ

死にがたしわれみづからのこの生命食
み殘し居りまだ死に難し

光無きいのちの在りてあめつちに生く
とふことのいかに寂しき

手を觸れむことも恐ろしわがいのち光
うしなひ生を貪る

たぽたぽと樽に滿ちたる酒は鳴るさび
しき心うちつれて鳴る

寂しさは屍に似たるわが家にこの酒樽
はおくられて來ぬ

この樽の終のしづくの落ちむ時この部
屋いかにさびしかるべき

酒樽をかかへて耳のほとりにて音をさ
せつつおどるあはれさ

おとろへしわが神經にうちひびきゆふ
べしらじら雪ふりいでぬ

ゆふぐれの雪降るまへのあたたかさ街
のはづれの群集の往來

ひとしきりあはく雪ふり月照りぬ水の
ほとりの落葉の木立

白粉のこぼれむとする横顔に血の潮し
きたりたそがれにけり

窓かけのすこしあきたるすきまより夜
の雪見ゆねむげなる女

投げかけし女ひとりのたましひをあは
れからだを抱きなやめり

酔ひはてて小鳥のごとく少女等はかろ
く林檎を投げかはすなり

のびのびと酒の匂ひにうちひたり乳に
手を置きねむれる少女

一時の鐘とほくよりひびきいや深に三
月風吹く夜のなやむかな

枕より離れしときのしづかなる女のひ
とみわれに對へり

倦みはてしわれのいのちにまつはりつ
斷えなむとして匂ふ黑髪

みさをなきをんなのむれにうちまじり
なみだながしてわがうたふ歌

かなしげに疲れはてつつわれいだく匂
へる腕ゆいかに逃れむ

あわただしく汝をおもひゆふぐれの窓
かけのかげに涙ぐみぬる

玉のごときなむぢが住める安房のなぎ
さ春のゆふべをおもひかなしむ

うれひつつ歩めば赤き上靴のしづかに
鳴れり二階のゆふべ

數知れぬをんなとちぎり色白のこのわ
かき友は酒をこのまず

身も投げつこころもなげつものをおも
ふゆふべかへさの電車の隅に

相寄りつ離れつ憎みなつかしみ若きを
どこのむれのごよめく

夕まぐれ酒の匂ふにひしひしとむくろ
に似たる骨ひびき出づ

沈丁花青くかをれりすさみゆく若きい
のちのなつかしきゆふべ

われ歌をうたひくらして死にゆかむ死
にゆかむとぞ涙を流す

獣あり混沌として黄に濁る世界のはて
をしたひ歩める

なほ耐ふるわれの身體をつらにくみ骨
もとけよと酒をむさぼる

酒すればわが健かの身のおくにあはれいたましき寂しさの燃ゆ

あな寂し酒のしづくを火に落せこの薄暮の部屋匂はせむ

酒のためわれ若うして死にもせば友よいかにかあはれならまし

歸りくればわが下宿屋のゆふぐれの長き二階に灯のかげもなし

書き終へしこの消息のあとを追ひさびしき心しきりにおこる

光線のごとく明るくこまやかにこころ衰へ人を厭へり

おとろへの極みに來けむ眼に滿てるあらゆる人の憎し醜し

愴恨と街をあゆめば大ぞらの闇のそこ
ひに春の月出づ

深深と赤き灯よどむいろ街を醉ふて走
れば足音がする

ひとつ飲めばはやくも紅く染まる頰の
友もわが眼にさびしかりけり

まれまれに相見る友のいづくやらむさ
びしげなるに心とらるる

齒を痛み泣けば背負ひてわが母は峽の
小川に魚を釣りにき

父おほく家に在らざり夕されば はやく
戸を閉し母と寢にける

ふるさとは山のおくなる山なりきうら
若き母の乳にすがりき

ふるさとの山の五月の杉の木に斧振る
友のおもかげの見ゆ

おもひやるかのうす青き峽のおくにわ
れのうまれし朝のさびしさ

親も見じ姉もいとはしふるさとにただ
檳榔樹を見にかへりたや

衰へてひとの來るべき野にあらず少女
等群れて摘草をする（五首戸山が原にて）

めづらかに野に出で來ればいちはやく
日光に醉ひつかれはてける

つみ草のそのうしろかげむらさきの匂
へる衣のかなしかりけり

梢あをむ木蔭にすわりつみ草のとほき
少女を見やるさびしさ

かの星に人の棲むとはまことにや晴れ
たる空の寂し暮れゆく

ふと寄れば昔なじみの或るをんななほ
三味ひきて此家に住みける

見詰めゐてふけたまひしと女いふみづ

からの老はいかに知るらむ

三味をおくをんなのまへの夜の白さわ

が古着物わびしかりけり

はや既に浸みをへけむわが五體酒をの

めども酔ふことをせず

ややしばしわれの寂しき眸に浮き彗星

見ゆ青く朝見ゆ

風光り櫻みだれて顔に散るこころ汗ば
み夏をおもへる

いちはやく四月の街に青く匂ふ夏帽子
をばうちかつぎけり

かのをとめ顔の醜し多摩川にわか草つ
みに行かむとさそふ

われ二十六歳歌をつくりて飯に代ふ世
にもわびしきなりはひをする

小田巻の花のむらさき散りてありまれ
にかへれるわが部屋の窓
頬をすりて雌雄の啼くなりたそがれの
花の散りたる櫻にすずめ

わが歌を見むひとわれのおとろへて酒
飲むかほを見ることなかれ
徳利取り振ればかすかに酒が鳴るわが
酔ざめのつらのみにくさ

月の夜半醉ひざめの身のとぼとぼとあ
ゆめる街の夏の木の影

あと月のみそかの夜より亂醉の斷えし
日もなし寢ざめにおもふ

風ひかり桃のはなびら椎の樹の落葉と
まじり庭に散りくる

いねもせず白き夜着きて灯も消さずく
ちずさむ歌のさびしかりけり

初夏の木木あをみゆく東京を見にのぼり來よ海も凪ぎつらむ（友へ）

別れたるをんなが縫ひしものなりき古き羽織を盗まれにけり

貧しければ心も暗し蟲けらの在り甲斐もなき生きやうをする

やうやくに待ちえしごとくわがこころあまへてありぬ病みそめし身に

濁りたるままにこころは凪ぎはてて醫
師の寢臺によこたはるかな

命より摘みいだすべき一すぢのさびし
さもなしかなしさも無し

思ひいでて寢ぬ夜しもなきあはれさの
二年を經てなほつづくらむ

なほもかく飽くことしらずひとを思ふ
われのこころのあはれなるかな

ふらふらと野にまよひ來ればいつのま
にさびしや麥のいろづきにけむ

はらみたる黑き小犬の媚びもつれ歩み
もかねつ靑き草原

いつ知らず摘みし蓬の靑き香のゆびに
のこれり停車場に入る

摘草のにほひ殘るゆびさきをあらひ
て居れば野に月の出づ

あを草に降りくる露をなつかしみ大野
に居ればまろき月出づ

わがいのち盡きなばなむぢまた死なむ
わが歌よ汝をあはれに思ふ

花見ればはなのかはゆし摘みてまし摘
むともなにのなぐさめにせむ

六月中旬、甲州の山奥なる茶温泉に遊ぶ、當時の歌二十二首。

雲まよふ山の麓のしづけさをしたひて旅に出でぬ水無月

たひらなる武藏の國のふちにある夏の山邊へ汽車の近づく

糸に似て白く盡きざる路の見ゆむかひの山の夕風のなか

辻辻に山のせまりて甲斐のくに甲府の
町は寂し夏の日

初夏の雲のなかなる山の國甲斐の畑に
麥刈る子等よ

雲おもくかかれる山のふもと邊に水無
月松の散り散りに立つ

遠山のうすむらさきの山の裾雲より出
でて麥の穂に消ゆ

山あひのちさき停車場ややしばし汽車
のとまれば雲降りきたる
停車場の汽車のまどなる眼にさびし山
邊の畑に麥刈れる子等

山山のせまりしあひに流れたる河とい
ふものの寂しくあるかな
大河の岸のほとりの砂めく身のさびし
さに思ひいたりぬ

山越えて入りし古驛の霧のおくに電燈
の見ゆ人の聲きこゆ

わが對ふあを高山の峯越しにけふもゆ
たかに白雲の湧く

おほどかに夕日にむかふ青山のたかき
姿を見ればたふとし

木の葉みな風にそよぎて裏がへるあを
山に人の行けるさびしさ

しらじらとほき麓をながれたる小河
また見ゆ夕山を越ゆ

青巖のかげのしぶきに濡れながら啼け
る河鹿を見出でしさびしさ

わが小枝子思ひいづればふくみたる酒
のにほひの寂しくあるかな

泣きながら桑の實を摘み食ふべつつ母
を呼ぶ子を夕畑に見つ

酸くあまき甲斐の村村の酒を飲み富士
のふもとの山越えありく

ゆふぐれの河にむかへばすさみたるわ
れのいのちのいちじろきかな

かへるさにこころづきたる掌のうちの
河原の石の棄てられぬかな

——旅の歌をはり——

めづらかに明るき心さしきたりたまゆ
らにして消えゆきしかな

このままに衰へゆかばこの酒のにほひ
もやがて身に耐へぬらむ

さやりなく青蕉の葉のもつれあふその
よろこびを夜の床にする

高空に雲のうかべるあどつちのありの
すさびも身にさびしけれ

枕敷きすひ終りたるひとすぢのけむり
にこころなぐさめて寝む

ふるさとの濱に寄るなる白波の繪葉書
をもてかへり來よとふ

夏の夜やここら少女のひとりだにわが
ものならぬかなしみをする

心ぬけし頬をかすかにながれたるこの
涙こそわりなかりけれ

むだつみのそこのごとくにこころ凪ぐ
樅の大樹にむかふゆふぐれ

すさみたるこころのひまに濡れて見ゆ
木の根に散れる青石かわれ

この瞳しばしを酒に離れなばもとの清
さに澄みやかへらむ

あかつきの寝覺の床をひたしたるさび
しさのそこに眼をひらくなり

この鼻のひくきが玉にきずぞかし肌の
きよさよよく睡るひとかな

あはれまたねむりたまふかたまたまに
逢ふ夜はわきて短きものを

なげやりのあまきつかれにうち浸り生
きて甲斐あるけふを讃へむ

衰ふる夏のあはれとなげやりのこころ
のすゑと相對ふかな

涙ややにうかび出づればせきあげしか
なしみは早や消えて影なし

影さへもあるかなきかにうちひそみわ
がいのちいま秋を迎ふる

いひがひなきわれみづからへつらあて
かとすれば死に親しまむとす

君住まずなりしみやこの晩夏の市街の
電車にけふも我が乗る

三味をひく手もとのふりのいかなれば
こよひのかくも身にはしむらむ

かりそめの一夜の妻のなさけさへやむ
ごともなし身にしみわたる

蟬とりの兒等にをりをり行き逢ひぬ秋
のはじめの風明き町

をみなへしをみなへし汝をうちみれば
さやかに秋に身のひたるかな

青やかに夜のふけゆけばをちかたに松

蟲きこゆ馬追も啼く

蟲なけばやめばこころのとりごりにあ

はれなることしげきよひかな

洪水にあまたの人の死にしことかかは

りもなしものおもひする

またさらにこぞの秋まで知らざりしい

のちの寂に行きあへるかな

九月初めより十一月半ばまで信濃國
淺間山の麓に遊べり、歌九十六首。

名も知らぬ山のふもと邊過ぎむとし秋
草のはなを摘みめぐるかな

朴の木に秋の風吹く白樺に秋かぜぞふ
く山をあゆめば

城あとの落葉に似たる公園に入る旅人
の夏帽子かな（小諸懷古園にて）

秋風や松の林の出はづれに青アカシヤ
の實が吹かれ居る

秋晴のふもとをしろき雲ゆけり風の淺
間の寂しくあるかな

淺間山山鳴きこゆわがあぐる瞳のおも
さ海にかも似む

わがこころ寂しき骸を殘しつつ高嶺の
雲に行きてあそべる

酒飲めばこころ和みてなみだのみかな

しく頬をながるるは何ぞ

秋かぜの吹きしく山邊夕日さし白樺の

みき雪のごときかな

なにごとも思ふべきなし秋風の黄なる

山邊に胡桃をあさる

胡桃とりつかれて草に寢てあれば赤と

んぼ等が來てものをいふ

かたはらに秋ぐさの花かたるらくほろ
びしものはなつかしきかな

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はし
づかに飲むべかりけれ

あはれ見よまたもこころはくるしみを
のがれむとして歌にあまゆる

殘りなくおのが命を投げかけて來し旅
なれば障りあらすな

旅人は松の根がたに落葉めき身をよこたへぬ秋風の吹く

かなしみに驕りおごりてつかれ來ぬ秋草のなかに身を投ぐるかな

小諸なる醫師の家の二階より見たる淺間の姿のさびしさ

秋風のそら晴れぬれば千曲川白き河原に出てあそぶかな

薄暗きこころ火に似て煽り立つ野山も
うごき秋かぜの吹く

顔ぢうを口となしつつ雙手して赤き林
檎を嚙めば悲しも

秋くさの花のさびしくみだれたる微風
のなかのわれの横顔

わがこころ碧玉となり日の下に曇りも
帶びず嘆く時あり

秋くさのはなよりもなほおとろへしわ
れのいのちのなつかしきかな

われになほこの美しき戀人のあるとい
ふことがかなしかりけり

松山の秋の峽間に降り來れば水の音あ
をしせきれいの飛ぶ

うちしのび都を落つる若人に朝の市街
は青かりしかな

身もほそく銀座通りの木の蔭に人目さけつつ旅をおもひき

絶望のきはみに咲ける一もとの空いろの花に酔ひて死ぬべし

黄ばみたる廣葉がくれの幹をよぢ朴の實をとる秋かぜのなか

かへり來て家の背戸口わが袖の落葉松の葉をはらふゆふぐれ

せきあげてあからさまにも小石めく涙

わりなき小夜もこそあれ

濁り江のうすむらさきの水草のここに

も咲けば哀しわが生は

衰ふる夏の日ざしにしたしみて晝も咲

くとや野の月見草

長月のすゑともなればほろほろと落葉

する木のなつかしきかな

沈みゆく暗きこころにさやるなく家を
かこみてすさぶ秋風

汝が彈ける糸のしらべにさそはれてひ
たおもふなり小枝子がことを

わが母の涙のうちにうつるらむわれの
姿のあさましきかな

おほかたの彼の死顔ぞ眼にうかぶここ
ろうれしく死をおもふ時

憫れめとなほし強ふるかつゆに似て衰
へし子は肺を病むてふ

戀人よわれらひとしくおとろへて尙ほ
生くことを如何におもふぞ

こころややむかしの秋にかへれるか寢
覺うれしき夜もまじりきぬ

ほろほろと啼くは山鳩さしぐめるひと
みに靑し木の間松の葉

黄なる山まれに聞ゆる落葉はかなしき
酒の香に似たるかな

むらさきの暗くよどみて光る玉夢のの
ちにもさびしくひかる

秋かぜの信濃に居りてあを海の鷗をお
もふ寂しきかなや

わがいのち闇のそこひに濡れ濡れて螢
のごとく匂ふかなしさ

投げやれ投げやれみな一切を投げ出せ
旅人の身に前後あらすな

あざれたるわれの昨日の生活の眼にこ
そうつれ秋草に寝る

酒嗅げば一縷の青きかなしみへわがた
ましひのひた走りゆく

秋かぜの都の灯かげ落ちあひて酒や酌
むらむかの挽歌等は

こほろぎの入りつる穴にさしよせし野
にまろび寝の顔のさびしさ

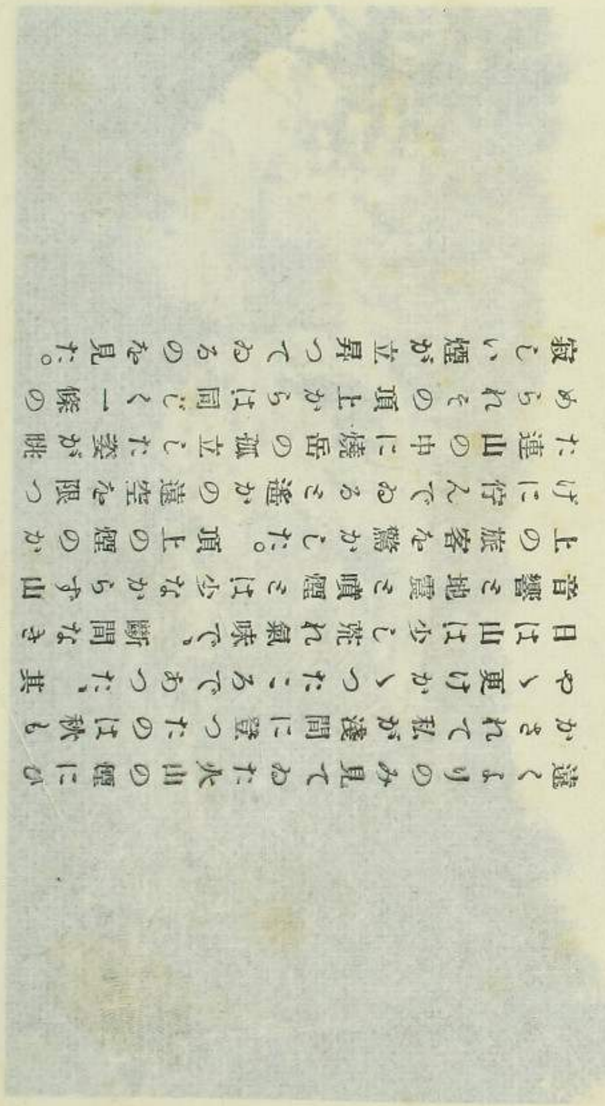
さらばいざさきへいそがむ旅人は裾野
の秋の草枯れてきぬ

山麓の古驛の裏をながれたる薄にごり
河の岸はなつかし

火の山のいただきちかき森林を過ぎら
むとしてこころいためり

雲去れば雲のあとよりうすうすと煙た
ちのぼる淺間わが越ゆ

火の山の老樹の樅のくろがねの幹をた
たけば葉の散り來る



日やかさく遠
音はゝれてより
響は更け私の
上の連山はかみ
の旅客地震少
連に佇む旅客地震少
山の中で驚き噴煙
煙を見つゝ荒れ
の頂に焼岳の遥
立昇つてゐる
上から孤峯
昇つてゐる
ゐは同立の
るじく遠空
のを一筋が限
見た。の眺つか
た。

寂しい山の
寂しい
煙が
立昇
上から
ゐは
るじく
のを
見た。

山
煙
の
つ
は
の
の
の

火の山の燒石原のけむりのかげ西ひが
しさし別るる旅人

風立てばさとくづれ落ち山を這ふ火山
の煙いたましきかな

見よ旅人秋のすゑなる山山のいただき
白く雪つもり來ぬ

眼をとめて暮れゆく山に對ふ時しみじ
みと身のあはれなりけり

あの男死なばおもしろからむぞと旅な
るわれを友の待つらむ

春のいろ落葉にまがひ蜥蜴の子おち葉
のなかを行く音寂しも

尺あまり延びし稚松に松かさの實れり
秋の山の明るさ

風止みぬ伐りのこされし幾もとの松の
木の間の黄なる秋の日

惶しき旅人のこころ去りあえず秋の林
に來て坐れども

秋の森ふと出であひし溪間より見れば
淺間に煙斷えて居り

渓あひの路はほそぼそ白樺の白き木立
にきはまりにけり

忘却のかげかさびしきいちにんの人あ
り旅をながれ渡れる

斯くばかり縮みをはれるものなればこ
の命またいつか延ぶらむ

眼は濁る腹いつぱいに呼吸づかむうら
やすにさへ逢ふ日知らねば

蟲けらの這ふよりもなほさびしけれ旅
は三月をこえなむとする

終りなき旅と告げなばわがむねのさび
しさなにと泣き濡るるらむ

はつとしてわれに返れば満目の冬草山
をわが歩み居り

冬枯の黄なる草山ひとりゆくうしろ姿
を見むひともなし

草のうへわがよこたはるかたはらに秋
の淡雪きえのこり居り

かかる時ふとこころ鏡戀しけれ葉の散る
木の間わが顔を見む

蒼空ゆ降り來てやがて去り行きぬ山邊
の雲もあはれなるかな

いただきの秋の深雪に足あとをつけつ
つ山を越ゆるさびしさ

冬草山鳥の立つにもあめつちのくづれ
しごとき驚きをする

ものおもひ斷ゆれば黄なる落葉の峡の
おくより水のきこゆる

秋の日の空をながるる火の山のけむり
のするにいのちかけけれ

日は暗く浮きあぶらなしわが命ただよ
ふかたに火の山の見ゆ

わがごとくさびしきこころいつの代に
誰がうづめけむ山に煙見ゆ

火の山のけむりのするにわがこころほ
のかに青き花とひらくも

火の山を越えてふもとの森なかの温泉
に入れば月の照りたる

火の山のけむりのかげの温泉に一夜ね
むりて去りし旅人

湯あがりをひとりし居ればわが肌に旅
をかなしむ匂ひこもれり

なつかしやわがさびしさにさしそひて
秋のあは雪ふりそめにけり

あはれなる女ひとりが住むゆえにこの
東京のさびしきことかな（以下歸京して）

人知れず旅よりかへりわが友のもうと
の家にねむる秋の夜

友が子のゆふべさびしき泣顔にならび
てものをおもふ家かな

友のごとく日ごと疲れてかへり來むわ
が家といふが戀しくなりけり

終りたる旅を見かへるさびしさにさそ
はれてまた旅をしぞおもふ

われを見にくらき都會のそこ此處に住
み居る友がみなつどひ來る

電燈のさびしきことよ旅路よりかへり
て友が顔を見る夜

——旅の歌をはり——

眼のまへのたばこの煙の消ゆるときま
たかなしみは續かむとする

鏡より沈めるひとみわれを見る死に對
ふごとなつかしきかな

けふもまた獨りこもればゆふまぐれい
つかさびしく點る電燈

賣り棄てし銀の時計をおもひ出づ木が
らし赤く照りかへす部屋

わがままは狂へる馬のすがたしきつか
れて今は横はるかな

思ひうみふとところ手してわが行けば街
のどよみは死の海に似る

ゆふぐれの風にしのびて匂ひ來ぬ隣家の庭の落葉のけむり

かいかがみ路ばたの石手に取れば涙はつひに頬にまろびいづ

歸るといふ世にいとはしきことのあり
夜更けてけふもとぼとぼ歸る

歩きつつひとり言いふはしたなき癖さへいつか身につきしかな

街を行きこともなげなる家家のなりは
ひを見て瞳おびゆる

ひもすがら火鉢かこみてゆびさきは灰
によごれぬ庭に吹く風

雪ふれり暗きこころの片かはにほのあ
かりさしものうきゆふべ

筆とめて地震の終るを待つ時のらんぷ
の前のわれの秋の夜

戀人の肺にしのべるやまひよりなつか
しいかな盃をとる

死をおもふかつて登りし火の山の足も
とに見し烟をおもふ

あざわらふ死の横顔にさそわれてわが
片頰にものぼる冷笑

『あれ見給へ落葉木立の日あたりにすま
ひよげなる小さき貸家』

ゆふまぐれ袂さぐれば先づこよひ淨瑠璃をきく錢は殘れり

わが部屋に朝日さす間はなにごとも身になおこりそ日向ぼこする

日向ぼこねむり入らむとするころのわが背のかたに散りくる落葉

日向ぼこ酒禁められて衰へしわれの身體が日に醉へるかな

日向ぼこ出勤前の友もまたわが背まく
らにうとうとする

日向ぼこ枕もとなるうすいろの瓶のく
すりに日の匂ふかな

たべのこしし飯つぶまけばうちつどふ
雀の子らと日向ぼこする

路ばたの枯葉ばやしの日あたりにくる
わがへりのいつ寢入りけむ

つらかりしもののおもひでなつかしく
なりゆくころもうらさびしけれ

蝙蝠に似むとわらへばわが暗きかほの
蝙蝠に見ゆるゆふぐれ

ただひとり離れて島に居るごときここ
ろ暫くうごかぬゆふべ

ゆふまぐれ赤いんきもてわが歌をなほ
してゐしが酒の飲みたや

ほんのりと酒の飲みたくなるころのた
そがれがたの身のあぢきなさ

さきまでのいらいらしさのいつ消えて
をんなのそばに斯く坐るらむ

ややすこし遅れて湯より出るひとを待
つ身かなしき上草履かな

槙の葉のあをの葉ずゑにつもる雪きゆ
るゆきをば見てありしかな

湯あがりのひとにまぢかく居ることの
春はかなしきひとつなるべし

白粉のあまきかをりも身にのらぬ湯あ
がりびとをなにとすべけむ

湯あがりのかほとかほとが鏡のうへい
たづらをするかなしき眼をする

ちりやすきはなのにほひにふとふれて
なりぬかなしき空のつばめに

わがかほにうすきねいきのうつつなや
灯の三階のしたをゆく三味

あれを聽けまくらまくらにしとしとと
したたりてくるとほき三味線

かの友もこの友もみな白玉のこころ濁
らずさびしきわれかな

獨りゐつひとつほしては一つ酌ぐさび
しき酒のわれのいのちか

見ればげに二十七なるわがつらと驚か
むとてわらふ白き齒

濠ばたの巣より乞食を追ひ立つるわか
き巡査のうしろかげかな

風のごとくあとさきもなき苦笑ひつら
にうかびぬ獨り座るに

封切れば枯れし野菊とながからぬ手紙
と落ちぬわが膝のうへ

狐にも巣ありといへりさびしさや林の
おくの眼にうつり來る

ひとりひとり親しきひとと離れゆくこ
のはかなさの棄てがたきかな

松も見ゆしら梅も見ゆ或るころのさび
しき安房をおもひ出づれば

梅やらむとわれをさがして來しひとと
松のはやしに行きあひしかな

梅つぼむころともなればいづくよりこ
のかなしさは身にかへるらむ

ただ二日我慢してゐしこの酒のこのう
まさはと胸暗うなる

いづくまでわれをあはれむはて知らぬ
汝がこころは海かさびしや

暗く重きこころをまたもたづさへて見
知らぬ街に巣をうつすかな

移り來て窓をひらけば三階のしたの古
濠舟ゆきかよふ

ふうらりとふところ手して住み馴れぬ
門を出づるはうらさびしけれ

移り來て見なれぬ街路の床屋よりいづ
るゆふべのくびのつめたさ

漂泊のかたみに殘すひげなれば斯くや
あはれに見えまさるらむ

星あをくながれて闇にかげひきぬわが
ふところ手さむし街路ゆく

買ひきたりこよひかく着てぬる布團う
りはなつ日はまたいつならむ

日もひさしくわれにかかはりなきごと
く思ひしかふと少女等を見る

さびしさのとけてながれてさかづきの
酒となるころふりいでし雪

雪ふるにさけをおもひつ酒飲みぬひと
りねむるはなにのさびしさ

雪ふれりと筆とりあげし消息につい書
きそへぬかなしげのこと

ふる雪になんのかをりもなきものをこ
ころなにとてしかはさびしむ

雪ふればちららちらとさびしさがな
まあたたかく身をそそるかな

はつとしてこころ變れば蒼暗くそこひ
も見えず降るそらの雪

灯のともる雪のふる夜のひとり寢の枕
がみこそなまめかしけれ

濠のはた獨りをとこがねる家ぞこころ
して漕げした通ふ舟

水の上にふりきてゆる雪の見ゆ酒の
にほひの身に殘るあり

知らぬ間に雨とかはりし夜のゆき酒の
のちなる指のさびしさ

草の葉のにほひなるらむいらいらさを
んなこひしくなりゆけるとき

かかる日は子供あつめに飴やの爺うた
ふ唄にもなみださしぐむ

ともすればかなしき愛に陷ちむとすた
だゆきずりに見むとおもふに

一昔まへにすたれし流行唄くちにうかびぬ酒のごとくに

虚無黨の一死刑囚死ぬきはにわれの『別離』を讀みゐしときく

がらす戸に白くみだれてふれる雪より
そひて見れば寂しきものかな

わが袖にひとつふたつがきえのこる雪
もさびしや酒やにのぼる

身もおもく酒のかをりはあをあをと部
屋に滿ちたり醉はむぞ今夜

いざいざと友にさかづきすすめつつ泣
かまほしかり醉はむぞ今夜

たまたまにただひとりして郊外にわが
出で來れば日の曇りたる

多摩川のあさきながれに石なげてあそ
べば濡るるわがたもとかな

春あさく藍もうすらに多摩川のながれ
てありぬ憂しやひとりは

多摩川の砂にたんぽぽ咲くころはわれ
にもおもふ人のあれかし

曇日の川原の藪のしら砂にあしあとつ
けて啼く千鳥かな

川千鳥啼く音つづけば川ごしの二月の
山の眼におもり來る

山のかげ水見てあればさびしさがわれ
の身となりゆく水となり

山かげの小川の岸にのがれ來てさびし
やひとり石投げあそぶ

行くなかれかの人情のかなしきになれ
がいのちとなにと爾へむや

山の樹よ葉も散りはてて鳥も來ずけふ
のわれにや似てやすからむ

石拾ひわがさびしさのことごとく乘り
うつれとて空へ投げ上ぐ

友もうし誰とあそばむ明日もまた多摩
の川原に來てあそばなむ

水むすび石なげちらしただひとり河と
あそびて泣きてかへりぬ

枝葉のみ眞暗くおもく打ち茂り根は枯
るる樹かこころさびしき

西吹かば山のけむりはけふもなほ君住
む國のそらへながれむ（答背山君歌四首）

なかぞらに山のけむりの斷ゆる時けだ
しや君も寂しかるべし

淺間山そのいただきゆ眺めたる君が下
野は雲ふかかりき

夜の牛乳飲みつつおもひふらふらと淺
間の烟に走るさびしさ

松おほき彼の鎌倉の古山に行かばや風
のなかに海見む

夜となれば瞳のおくのよろこびのさび
しいかなや薄く汗帯ぶ

常陸山負くるなかれさこころのうちい
のるゆふべは居る所無し

常陸山つひに負けたる消息は聞くにし
のびずわれ歌咏まむ

山を抜く君がちからの衰へかなきさ落
ちゆく汐のひびきか

わだつみの底の濁りか手をつかねもの
うき空のもとに棲みたる

さびしさは蝶にかも似むこころにはつ
ゆかかはらず過ぐす朝夕

をりをりの夜のわが身にしのび入りさ
びしきことを見する夢あり

酒飲めば鼻よりうすく血の出づる身の
おとろへをいかに嘆かむ

いまは早や生死なるべき酒の香をうら
さびしくも戀ひわたるかな

いつとなくわれと身體をたのむこと薄
らぎそめて在りぬ晝夜

よぼよぼとわれ慰めに行くわれの姿か
徳利あまた並べる

軒したは濁れる海邊手に持つは畫のく
るわの淺きさかづき

この家の軒のしたには舟も無し寄る波
もなし寂しき海かな

手をうちて踊れるわれのあはれさにな
ほ手をうちてしきりに踊る

かたはらにならぶ銚子の三つふたつ早
やうらさびしるひそめしかな

沙さすやくるわの裏の濁り江に帆を垂れてゆくゆふぐれの船

岸ちかくゆたかに過ぐる大船に人聲もなしあをき灯ともる

ゆふぐれの水にうかべばこどもなうさびしき群ぞ沖の鷗は

かもめかもめ空に一羽が啼くときは水に入らむと身のかなしけれ

おそらくは舟人ならむ唄のよさはやひ
けすぎのひやかしの群

かたはらの女去りたるこころよさなみ
だのごとき朝の酒かな

手まくらのあさきえにしも身にはしめ
またの夜逢はむうしやうつり香

ちひさなる舟にわが乗りふらふらと漕
ぎいでてゆく春の濁り江

街暗くかすめる裏の濁り江に居群れて
啼かぬ海の白鳥

濁り江はかすみて空もかき垂れぬわが
居る舟に啼き寄る鷗

枯草にわが寝て居ればそばちかく過ぎ
る子供のなつかしきかな

かれ草のなかに散りたる楢の葉をひろ
はむとして手のさびしけれ

われとべば犬も走りぬ目のかぎり薄日
流れてかなしき野邊に

悲しめるあるじ離れて目もとほく野末
を走る愛犬のあり

鐵砲の彈のごとくに野を走るわが愛犬
を見るもさびしき

枯草にわが寢て居ればあそばむと來て
顏のぞき眼をのぞく犬

ゆふまぐれ遊びつかれてあゆみ寄る犬
と瞳のひたと合ひたる

うす曇りなまあたたかき冬の日に犬と
あそぶはかなしきことぞ

ましぐらにわれを馳け抜き立ちごまり
振返る犬の眼を打擲す

かなしきは愛のすがたか口笛にとほく
野ずゑを馳せ來る犬

膝にゐて深き毛を垂れ樫の葉に夕日散
るときわが小犬鳴く

指に觸るるその毛はすべて言葉なりさ
びしき犬よかふしきゆふべよ

杉の樹をつと離れたる夕風のなかの烏
の大いなるかな

一本の杉の木の根に起きかへるわがか
げ長し野は薄日かな

若き日をささげ盡くして嘆きしはこの
ありなしの戀なりしかな

秋に入る空をほたるのゆくごとくさび
しやひとの忘られぬかな

はじめより苦しきことに盡きたりし戀
もいつしか終らむとする

おもかげの移るなかれとひとのうへに
いのりしことはまたくあれども

五年にあまるわれらがかたらひのなか
の幾日をよろこびとせむ

一日だにひとつ家にはえも住まず得忘
れもせず心くさりぬ

わがために光ほろびしあはれなるいの
ちをおもふ日の來ずもがな

ほそほそと萠えいでて花ももたざりき
このひともとの名も知らぬ草

わびしさやふとわが立てる足もとの二
月の地を見て歩み出づ

石油をつぐ音きこゆ二階より藪ごしに
見るちひさき家に

藪ふかく窓のもとよりうちつづく友が
二階の二月の月の夜

ふつとして多摩の川原のなつかしく金
を借り來て一夜寢に行く

砂のなかに顔をうづめて身をもだえ泣
くごとくして去りぬ川原を

かへるさは時雨となりぬ多摩川の川邊
の宿に一夜寢しまに

わが顔に觸れて犬在り枯くさの日向に
いねてもの思ふとき

杉の木の間ものおもふわが顔のまへ木
漏日のかげに坐りたる犬

まさむねの一合瓶のかはゆさは珠にか
も似む飲まで居るべし

誰にもあれ人見まほしきこころならむ
けふもふらふら街出で歩く

わが部屋にわれを待つべく一樽に酒は
斷たねどさされどさびしき

其處此處の友はいましも何をしてなに
思ふらむわれ早も寢む

わが部屋にわれの居ること木の枝に魚の棲むよりうらさびしけれ

三階の玻璃窓つつみ煤烟のにほへるなかにひとり酒煮る

芝居見て泣けるなみだをひと知れずぬぐはむとして身をはかなみぬ

平土間のほこりにまみれわがなみだ頬をながるるわびしいかなや

かなしみにこころもたゆく身もたゆく
酒もものうし泣きぬれてゐむ

うち見やる舞臺のほかのさびしさにつ
まされてこそぬぐへ涙を

しくしくとまたもなみだの眼ににじむ
この劇場のはなれともなや

そこはかと深山の松葉ちることか寝ざ
めのこころ寄るところなし

わだつみの底にあを石ゆるるよりさび
しからずやわれの寝覚は

明けがたの床に寝ざめてわれと身の呼
吸することもなにぞさびしき

寝ざむればうすく眼に見ゆわがいのち
終らむとするきわの明るさ

眼のさめてしづかに頭もたげつつまた
いねむとす窓に星見ゆ

夜ふかく濠にながるる落し水聞くこと
なかれ寝覺むるなかれ

先づ啼くは濁る濠邊のいしたたきほの
青き朝を寝ざめてあれば

かなしくもいのちの暗さはまらばみ
づから死なむ砒素をわが持つ

青海のひびくに似たるなつかしさわが
眼のまへの砒素に集る

一つぶの雪にかも似む毒藥の砒素ぞ掌に在りあめつちの隅

なとがめそ腐るいのちを恐ろしみなつかしくこそ砒素をわが持て

死にてのちさむく冷ゆれど顏のさま變らずといふ砒素はなつかし

まなこ閉ぢ口をつぐめるさびしさに得耐へずついと立てど甲斐なし

ふるさとの美美津の川のみなかみにさ
びしく母の病みたまふらむ

さくら早や背戸の山邊に散りゆきしか
の納戸にや臥したまふらむ

病む母よかはりはてたる汝が兒を枕に
ちかく見むと思ふな

病む母のまくらにつどひ泣きぬれて姉
もいかにかわれを恨まむ

病む母を眼とぢおもへばかたはらのゆ
ふべの膳に酒の匂へる

病む母をなぐさめかねつあけくれの庭に
や掃くらむふるさとの父

葉をすべる露のごとくになげやりのこ
ころとなりて行くは何處ぞ

終に身を酒にそこなひふるさとへ歸る
か春のさびしかるらむ（友へ）

わが暗きこころを海に投げ入れむ沈み
て巖となりて苔生ひむ

あめつちに獨り生きたるゆたかなる心
となりて擧ぐるさかづき

指さきにちさき杯もてるときごとよめき
ゆらぐ暗きこころよ

なにとせむすこし醉ひたる足もとのわ
が踏む地よりかなしみは湧く

いまは早やとらへ難かり蒼暗き空に離れてわれの悲しむ

眼も鈍くこころくもればおのづから眉さへ暗し春の街見ゆ

雪消えてけふもけむりの立つならむ淺間よ春のそらのかたへに

あは雪のとけてながれむ火の山のかの松原に行きて死にたや

静かなりし日にかへらむとここふより
思へるごとしわれのよこ顔

をりをりは見えずなれどもいつかまた
巣にかへり居り軒の蜘蛛の子

わが部屋に生けるはさびし軒の蜘蛛屋
根の小ねずみもの云はぬわれ

誰ぞひとりほほゑめばみないちように
酒をしぞ思ふ部屋のゆふぐれ

大君の城の五月の森林にゆふさりくれ
ばともる電燈

河を見にひとり來て立つ木のかげにほ
のかに晝を啼く蛙あり（以下十三首下總稻毛にて）

いつのまに摘みし菜たねぞゆびさきに
黄なるひとゝと持てる物思ひ

かくばかり清きこころぞあざむくにな
にの難さと笑みて爲にけむ

眼とづるはさびしきくせぞおほぞらに
雲雀啼く日に草につくばひ

根のかたにちさく坐れば老松の幹より
おもく風降り來る

海光る松の木の間の白砂をあゆむもさ
びし坐らむも憂し

かなしさに閉ぢしまぶたの瞼毛にも來
てやどりたる松の風かな

耐へがたくまなこ閉づればわが暗きこころ梢に松風となる

波もなき海邊の砂にわが居れば空の黄ばみて春の月出づ

なぎさ邊の藻草昆布のむらがりのなつかしいかな春の月出づ

眼も開かず砂につくばひ夕風の松の木の間にわがひとり居る

しら砂にかほをうづめてわれ禱るかな
しさに身をやぶるまじいぞ

このこころ慰むべくばあめつちにまた
なにものの代ふるあらむや

なにはなく夭死せむとおもひゐし彼は
まことにけふ死にけり

思ふとなく思はるることさびしけれさ
もなき友の死にゆきしとぞ

よべもまた睡られざりき初夏の午前の
街に帽かむり出づつ

酒を見てよろこぶわれのよこ顔をながめて居ればさしぐみ來る

衣ぬげば五月の松のこずゑより日あをく流れ肌に匂へる

松脂の匂ひかわれの寂びしめるいのちのはしか一すぢとなる

森出でてあをき五月の太陽を見上ぐる
額のなにぞ重きや

かたはらの地を見詰めて松の根にわれ
の五月をさびしがるかな

松の葉のしげみにあかく入日さし松か
さに似て山雀の啼く

こまやかに松の落葉の散りばへるつち
より蝉の子の這ひ出づる

ゆく春のゆふ日にうかみあかあかとさ
びしく松の幹ならぶかな

わが肌の匂ふも肌のうへを這ふ蟻のあ
ゆみもさびしき五月

松の葉の散りしく森にいねるとてわが
手枕のいたむ晝かな

松の根の落葉にいねてものを思ふ夏の
背廣の紺の匂ひよ

松ばやしわが寝て居ればひらひらと啼
いて燕がまひ過ぎしかな

あなあはれいつかとなりの楢の葉に這
ひもうつれる簑蟲の子よ

松やにのあをき匂ひの血となりてわが
身やめぐる森の午後の日

草わけて雲雀の巣をばさがすとてわれ
の素足のいたむ晝かな

美しく縞のある蚊の肌に來てわが血を
吸ふもさびしや五月

日も青きすすきの原に蟲を喙みつばく
らあまた群れあそぶかな

松の花うす〻匂ふにさそはれてわが鬱
憂の浮き出でむとす

おほいなるむらさきの桐手に持てばわ
が世むらさきに見ゆる皐月野

わかやかに立てるすすきにふと觸れし
小指の切れて血のしみいづる

下總の國に入日し榛はらのなかの古橋
わが渡るかな（以下下總市川にて）

はり原やものおもひ行けばわが額のう
すく青みて五月けぶれる

あを草のかげに五月の地のうるみ健か
なれとわれに眼を寄す

たゞひとり杉菜のふしをつぐことのあ
そびをぞする河のほとりに

藪すゝめ群るる田なかの停車場にけふ
も出で來て汽車を見送る

しろき花散りつくしたる下總の梨の名
所のあさき夏かな

袖ひろき宿屋の寢衣着つつ見るアカシ
アの花はかなしかりけり

あめつちの青くくもれる河の邊の葦原
に巣をまもる鼓切鳥

身を寄せし草のしげみのふかければう
らなつかしく物やおもはむ

ゆく春の草はらに來てうれひつつ露と
もならぬわがいのちかな

あを草の野邊をかへればわが影のいつ
しか月となりにけるかな

町の裏川蒸汽船より降り立てば花火を
あげて子供あそべり

榛はらのあをくけぶれる下總に水田う
つ身はさびしからまし

ありなしの貧しき戀になればわが
泣くことの斯くも繁なる

路上をはり

明治四十四年九月九日印刷
明治四十四年九月十二日發行

正價七拾錢

著作者　若山繁
東京市小石川區竹早町七番地
發行者　高橋市作
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地
印刷者　遠藤廉治
東京市麹町區飯田町二丁目六十八番地
印刷所　公木社

不許復製

發行所　博信堂書房
東京市小石川區竹早町七番地
振替口座東京一三八五五

故尾崎紅葉著

紅葉遺稿

定價九拾錢
郵税八錢

屑屋より發見されたる
不朽の名作

發行所　東京市小石川區竹早町
振替貯金一三八五五　博信堂